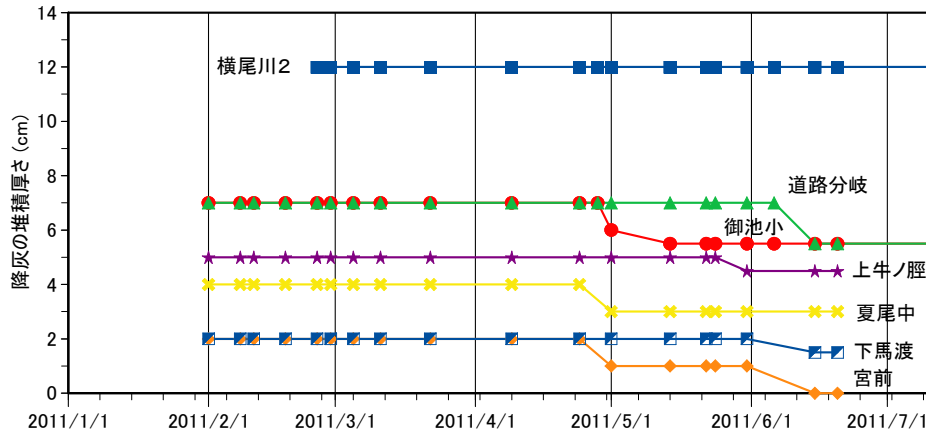
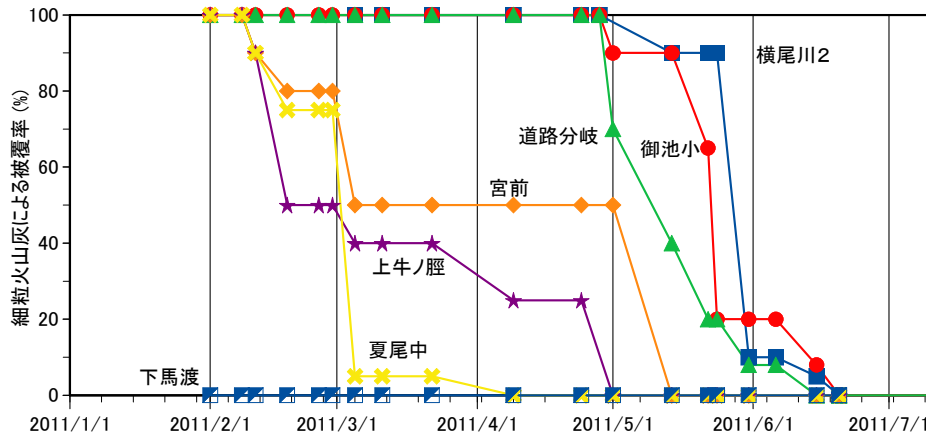


# 高千穂峰南東側の各地点（新燃岳から6.5～13.3km）における堆積物の全体厚さと細粒分による表面被覆率の時間的変化



厚さは定点において定規を使いほぼ1cm単位で計測した値。



被覆率は1m四方の定点区画において目視で判断した値。

- 各地点とも堆積物の大部分は軽石から成っていた(宮前を除き)。
- 厚さ分布は火口からの距離に調和していた。
- 噴火直後から6月下旬まで5カ月間、堆積物の全体厚さはどの地点でもほぼ変わらなかった。現在もほぼ同じ厚さが保たれている。
- すなわち、面的に厚さが大きく減る侵食は起きていない。

➤高千穂峰南東側では、細粒火山灰が軽石の表面を覆って堆積した。その厚さは国道223号付近で1cm位、上牛ノ脛や夏尾中で5mm位だった。

➤牛ノ脛や夏尾中など厚さが薄い地点では、細粒火山灰は2月～3月の弱い雨でほぼ侵食され尽くした。

➤厚さ1cmの地域では、細粒火山灰が表面から流亡し尽くすのは5月のやや強い雨まで経ってからで、6月初旬には下の軽石が広く露出した。

# 降雨時の斜面表面流出量の観測



観測斜面の全景  
(3/25設置時)



4/28の斜面の状況，表面を火山灰が完全に覆う。

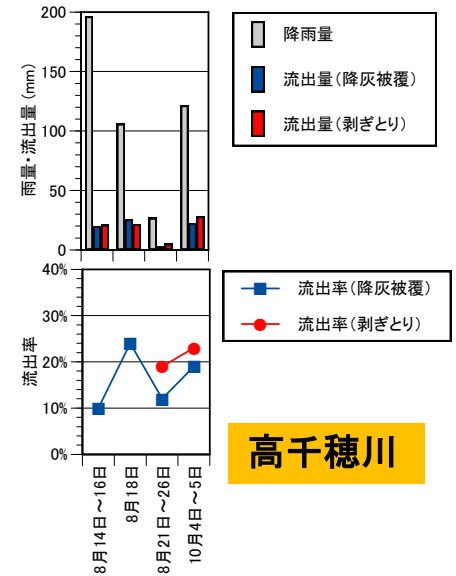
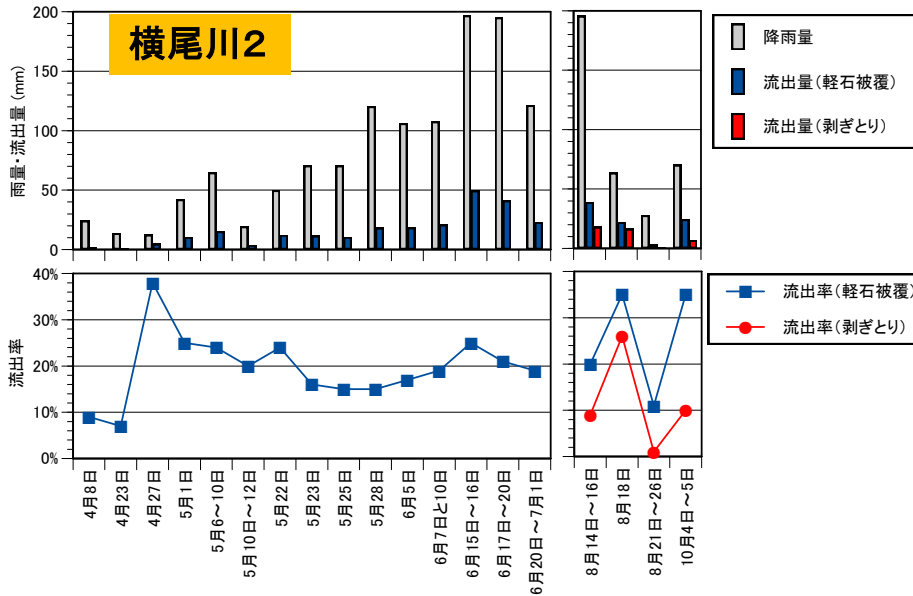


6/15の斜面の状況，火山灰が流亡し尽くし，軽石が露出。



6/20撮影，火山灰が軽石の間隙を目詰まりさせている。板状に固まっている。

- 横尾川2にて，ひと雨ごとに雨量と表面流出水量を計測した。期間は4・5・6月。
- 一時中断後，8月中旬から軽石を剥ぎとった斜面も設け観測再開。また，新たに高千穂川でも火山灰斜面と剥ぎとり斜面を設定し，観測開始。



- 4・5・6月において，流出率はどの雨でも20%前後であった。
- 表面の火山灰の被覆が無くなっても，流出率は変わらなかった。火山灰が軽石の間隙を目詰まりさせていたため。
- 8月以降も流出率は大きく変わっていないと考えられる。
- 軽石剥ぎとり斜面では，表面流出が少ない。
- 横尾川2の火山灰 D50 = 0.06 mm
- 元斜面の表土 D50 = 1 mm

- 高千穂川での表面流出は，横尾川より少ない様である。
- 火山灰剥ぎとり斜面の方が表面流出は多い。(雨撃層の形成か?)
- 高千穂川の火山灰 D50 = 0.11 mm
- 元斜面の表土 D50 = 0.15 mm

横尾と高千穂の表面流出の差異は，粒径が原因の可能性あり